様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１６７
研究課題名（和文）　日本語と韓国語の談話における文末についての基礎研究

研究課題名（英文）

研究代表者
金　珍娥（KIM　JINA）
明治学院大学・教養教育センター・准教授
研究者番号：30440184

研究成果の概要（和文）：

日本語と韓国語の談話における文末のありようを，述語文と非述語文，文末の構造，緩衝表現といった観点から明らかにした．談話単位論の理論的な構築も行った．研究の主要な成果は『談話論と文法論――日本語と韓国語を照らす』（くろしお出版，2013 年）として公刊される．

研究成果の概要（英文）：

This study clarified how to end a sentence in Japanese and Korean discourse from the viewpoint of predicate/non-predicate sentence, structure of sentence endings and buffering expression. Theoretical study on units of discourse was also performed. The main results of the study will be published in a single volume entitled “Discourse and Grammar: Japanese and Korean” (Kurosio Syuppan, Tokyo, 2013).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：言語学、日本語と韓国語、対照研究、談話分析、韓国語教育

１．研究開始当初の背景

韓国語の談話研究においては，談話の構造や構成に関わる研究があるが，本研究が対象としている日本語と韓国語の対照研究と，韓

国語についての研究は，その数は非常に少なかった．公刊されている研究書もわずかであった．また談話における文のありようを見る研究は，さらに限られており，日本語と韓国語の文のありようの全体像を対照言語学的な視座から見る研究は事実上なかったと言える．これが本研究の開始当初の客観的な背景である．

他方，研究代表者による次のような研究が本研究の主体的な背景となっている：

① 金珍娥(2008)：日本語と韓国語の文末における緩衝表現の研究
② 金珍娥(2006)：日本語と韓国語の談話における文末の構造の研究
③ 金珍娥(2004b)：日本語と韓国語の談話単位の同定に関する研究
④ 金珍娥(2004a)：あいづち発話に関する日韓対照研究
⑤ 金珍娥(2003)：話者交代や割り込みなど談話の構造や構成に関する日韓対照研究
⑥ 金珍娥(2002)：スピーチレベルシフトの日韓対照研究

２．研究の目的

本研究は，日本語と韓国語で実際に〈話されたことば〉の談話を成す〈文〉のあり方を，とりわけ文末の表現に注目しつつ，描き出すための基礎研究を行うことにある．いわゆる談話分析だけでなく，また文法研究だけでもない，談話論と文法論を統合した研究である．

３．研究の方法

研究方法の理論的な主軸としては，談話の構造や会話スタイル中心の談話研究から，文法的な観点も取り入れる談話研究へ，〈書かれたことば〉中心の文法研究から〈話されたことば〉のあり方も見据える文法研究へ，そして，そうした談話分析と文法論との統合された研究へと，進むことを目指す．談話論と文法論の統合である．

研究の実践的な方法としては，実際に話された談話を用いて，その談話を成す，1 つ 1 つの文を最も核心的な部分となる文末に注目し，文末の構造体を照らし出してゆくものである．異なる人数 160 名，計 80 組のソウル方言話者，東京方言話者の談話を収集し，談話データとした．データは話者の徹底した条件統制がなされている．

分析にあたっては，談話に出現した全ての文について，主に次のような観点から見た：

(1) 文末が述語で統合されている〈述語文〉と述語で統合されていない〈非述語文〉とに分類し，談話における文が，いかなる姿をしているのかを見る．
(2) 文はいかに結ばれるのか，文の文末の構造体の仕組みを見る．
(3) 〈緩衝表現〉(buffering expression）と本研究が名づける表現のありようをみる．

４．研究成果

4.1.研究の前提となる原理論の構築

本研究においては，〈談話分析〉(discourse analysis)の術語を，談話論の核となる方法として用い，本研究が扱う学問分野の名称としては〈談話論〉(discourse theory)と呼び，区別することで，学問分野としての〈談話論〉を，次の 2 つの条件を併せ持った研究を行うものとして位置づけた：

1) 音声言語の，実際に〈話されたことば〉による研究
2) 1 文を超える〈談話〉レベルの研究

その上で，談話論と文法論の統合という観点から，次のような前提を踏まえ，研究を進

めた.

本研究は言語の存在様式としての〈話されたことば〉,〈書かれたことば〉と，言語の文体や表現としての〈話しことば〉,〈書きことば〉とを区別する.〈話されたことば〉のひとまとまりを〈談話〉とし,〈書かれたことば〉のひとまとまりを〈テクスト〉と呼んで，これも厳密に区別する.

談話のうち，2 人以上が直接対面して行う談話を〈対話〉，2 人以上の話し手の話のやり取りを〈会話〉とする．また予め用意された〈書かれたことば〉によるテクストを持たず，自由に話す談話を〈自由談話〉，予め用意された〈書かれたことば〉のテクストがあり，そのテクストに沿って話す談話を〈拘束談話〉と呼ぶ．主題の有無による〈主題談話〉,〈非主題談話〉，電話などの媒体の有無による〈媒体談話〉,〈直接談話〉などを始め，談話の様々な類型化を行った.

以上は確固たる研究のための原理論的な理論化である.

4.2. 研究の方法論の定式化

談話論研究の方法についても，これまで明確ではなかった点を含め，次の 2 つの観点から可能な限り定式化した：

1)データ収集の方法論

話者選定の原則，データ収集の工程など

2)データ構築の方法論

複線的文字化システム，表記法など

4.3. 談話単位論

談話を論ずるための，談話における様々な単位についての概念規定を行った．本研究における談話の主要な単位は次のようにまとめることができる：

本研究における談話の単位の定義

単位		定義
動的単位	【turn】	一人の話者が， turn 切断子，前後の沈黙により，発話を止めるまでの発話の遂行
静的単位	/文 sentence/	文法的実現体 モダリティを随伴し，1 つ以上の単語が発話として実現する
	［発話単位 utterance unit］	音声的実現体. 一人の話者の turn の中でも文の切れ目，turn 切断子，前後の沈黙により分けうる
発話 utterance		1 つ以上の発話単位の集合

とりわけ，これまで漠然と「順番」などと言われてきた〈turn〉を,「一人の話者が，turn 切断子，前後の沈黙により，発話を止めるまでの発話の遂行」と明確に規定し，発話行為の動的な単位として位置づけ，発話構成の静的な単位である〈文〉や〈発話単位〉との関わり合いを体系的に位置づけた.〈turn〉を浮かび上がらせる〈turn 切断子〉の存在についても明らかにした.

こうした体系化により，談話における〈あいづち発話〉を〈turn〉として位置づけることが可能となり，談話の動的な展開を把握する理論的，実践的な基礎を獲得しうる.

4.4.文構造論

日本語と韓国語は基本的に文末に述語を持つ．文を文たらしめる根幹が文末にあるゆえに，本研究では〈話されたことば〉の特徴を文末から照らしている．文末に注目することで，日本語と韓国語の〈話されたことば〉におけるムード形式をいわば総浚いすることができ,〈話されたことば〉の文の姿がいかなるものであるかを見ることが可能となる.

次のような点を主要な軸とし，分析した：

(1) 述語の有無

本研究の最も根幹を成す軸である．述

語を有さない非述語文と，述語を有する述語文で区別することで，統辞論から文の構造を照らすことができる．

(2) 品詞の区別

非述語文は，文末の品詞を浮彫りにする．そのあり方は形態論と品詞論から文の構造を照らすことができる．

(3) 総合的な形と分析的な形の区別

述語文は，総合的な形と分析的な形に分類する．文末を成す述語の構造の違いを照らすことができる．

(4) 用言の形態・機能的カテゴリー

述語文は，文末を終止形，接続形，連体形，名詞形，引用形の用言の形態・機能カテゴリーに分類する．文を締めくくる最後の終わりのあり方を照らすことができる．

(5) 内容志向発話と機能志向発話の区別

非述語文と述語文の両方において行う．あいづちや聞き返しなどの機能志向発話を取り出すことで文を文法機能とは異なる談話機能から照らすことができる．

文末の述語に注目し，談話に出現する全ての文を次の 2 種に分類しうる：

述語文(predicate sentence)
＝文末が述語で統合されている文
非述語文(non- predicate sentence)
＝文末が述語で統合されていない文

日本語と韓国語それぞれ，〈初対面同士の会話〉28 組と〈友人同士の会話〉12 組，計 80 組の談話と，日本語の異なり人数 80 名，韓国語の異なり人数 80 名，計 160 名の発話に現れた〈述語文〉と〈非述語文〉の総数は次の通りである：

日本語の述語文と非述語文の総数

	文の数	比率
述語文	3,814	42.0%
非述語文	5,258	58.0%
総文数	9,072	100.0%

韓国語の述語文と非述語文の総数

	文の数	比率
述語文	3,292	46.3%
非述語文	3,813	53.7%
総文数	7,105	100.0%

〈非述語文〉の存在は，談話において決定的な出現頻度を示していることがわかる．これまで〈述語文〉中心に議論されてきた文法論についても，こうした事実は強く再考を迫るものだと言える．

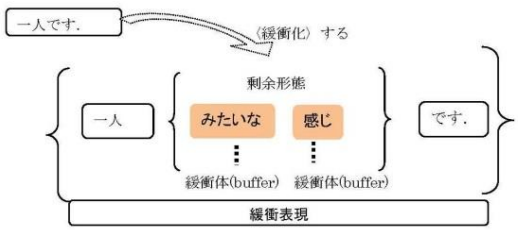
〈初対面同士の会話〉か〈友人同士の会話〉か，また世代別にはどうかなどについても調査を行っている．

4.5. 緩衝表現論

緩衝表現とは，例えば，「一人です」という文に対して，「一人みたいな感じです」といった文の表現をいう．これを次のように定義する：

〈緩衝表現〉（buffering expression）

「完全な」文としての明確さを失わせ，ぼかしたり，間接化する，〈話し手のモーダルな態度〉を示す表現



本研究では談話に出現する緩衝表現の様々な様相を記述，整理し，計量的な調査と共に，

理論的な位置づけを行った．術語は次のごとく説明しうる：

〈緩衝化〉:「一人です.」で言い終えることができる表現を,「一人みたいな感じです.」という緩衝表現にすること

〈剰余形態〉:「一人です」という「完全な」文についた,｛みたいな感じ｝といった，必ずしも必要とされない形態

〈緩衝体〉(buffer) :「みたいな」,「感じ」といった剰余形態の 1 つずつの item

〈緩衝表現〉: 緩衝化を起こす,〈緩衝体〉を有する表現．例えば「一人です.」に対して,「一人みたいな感じです.」とする表現

述語の有無を軸とし,〈緩衝表現〉(buffering expresstion)を実現している述語文を〈述語文 buffer〉,非述語文を〈非述語文 buffer〉と名づけた.「早く働いてとかって思ったりするんですよね.」は前者,「予備校とか.」は後者の例である.

全ての緩衝表現について，緩衝表現の類型化を行った．引用構造との関わり，連体形終止文との関わりなどについても言語事実に立脚しつつ明らかにしている.〈緩衝体〉が 3 つ, 4 つと続いて現れる〈複合緩衝体〉の〈緩衝表現〉の出現も注目される：

管理がずさんになっ｛たり｝とか｝してんのかな｝とか｝思っ｝たんですけど.

例えば文の連体形終止は，被修飾体言の出現を期待させるわけであるが，期待される被修飾体言を表さない構造，つまり期待される何かが不足する〈欠如構造〉と，上の例のように期待される以上の形が現れる〈剰余構造〉という〈過不足構造〉が，構造的な仕掛けとして緩衝表現を形作っていることが見て取れる.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計５件）

① 金珍娥著 『談話論と文法論――日本語と韓国語を照らす』 くろしお出版.（2013 年出版確定）

＊単行本である金珍娥著の一部として成果を盛り込んだ．基礎研究の学問的な成果をまとめた研究書である．文末論は，述語文と非述語文の分布や非述語文，文末の緩衝表現などを主題とするいくつかの章で大々的に扱っている．書籍の刊行自体は 2013 年夏となる.

② 野間秀樹編著 『韓国語教育論講座第 2 巻』 2012 年 10 月 15 日．くろしお出版.（金珍娥「談話論からの接近」. pp.485-520.）

③ 野間秀樹編著 『韓国語教育論講座第 2 巻』 2012 年 10 月 15 日．くろしお出版.（金珍娥「間投詞の出現様相と機能」pp.427-465.）

＊研究の成果の一部を上の②③2 つの論考として発表した.

④ 野間秀樹・金珍娥共著 『韓国語学習講座凜 RIN 1 入門』 2012 年 9 月 30 日．大修館書店.

＊学問的な成果の基礎の上に立って，韓国語教育への実践的な応用の成果を盛り込んだ．既存の学習書の

ように著者が頭で例文を考え出すといったありかたではなく，生きた談話についての本研究においてもたらされた知見を，言語学習に生かすものである．実際の談話に現れる，前置き表現，あいづち表現，間つなぎ表現，聞き返し表現などといった，談話を成り立たしめる重要なデバイスを明示し，学習の１つの要として位置づけた．また談話において重要な役割を果たす間投詞を学習のステップの中に大々的に位置づけた．

⑤　金珍娥著．野間秀樹監修　『ドラマティック・ハングル』　2012 年 4 月 10 日．朝日出版社．

＊韓国語教育への実践的な応用の成果は，DVD ブックである本書にも一部盛り込んでいる．

６．研究組織

(1)研究代表者

金　珍娥（KIM　JINA）

明治学院大学・教養教育センター・准教授

研究者番号：30440184

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし